慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	理想言語はどこに行ったか? : W・ベンヤミンとL・ウィトゲンシュタインの言語観比較
Sub Title	Wohin ist die ideale Sprache gegangen? : Die Sprachphilosophien bei W. Benjamin und L. Wittgenstein
Author	粂川, 麻里生(Kumekawa, Mario)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.69, (1995. 12) ,p.176(69)- 190(55)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00690001-0190

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理想言語はどこに行ったか？
—W・ベンヤミンとL・ウィトゲンシュタインの言語観比較

粂　川　麻　里　生

1．はじめに　—補助線としての理想言語

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは，1889年ウィーンに生まれ，1951年ケンブリッジで死んだ。ヴァルター・ベンヤミンは，1892年ベルリンで生まれ，1940年にピレネー山中でナチスの手先に捕らえられ自殺した。両者は直接に相知ることはなかったし，互いの著作も知ることはなかった。しかし，この同時期に生きた2人のユダヤ人思想家は，ともに主としてドイツ語で執筆を行い，きわめてユニークな言語哲学を展開したのである。両者はいまなお現代思想の重要な源泉でありつづけており，言語哲学が論じられる際にはしばしば言及される。しかし，それにもかかわらず，両者を関連づける研究はさほどなされていない。これは，ウィトゲンシュタインが異色の存在ながら哲学史上の人物とされるのに対し，ベンヤミンは幅広い射程を持った文芸批評家として受容されることが多いためであろう。しかし，この現在きわめてアクチュアルな関心を寄せられる二人を比較することは，むしろそれがある種の違和感を伴えばこそ，言語という捉えがたい対象の見えざる姿を浮かび上がらせる助けになりうるのではないだろうか。モノローグによっては語りえないものが，二者の対話によってはじめて語られることもあるだろう。

本稿では，ベンヤミンとウィトゲンシュタインの言語観を比較するが，その際，発想の補助線として「理想言語」あるいは「普遍言語」と呼ばれる問題を設定してみたい。一見かなり異なったもののように見える両者の言語理論が，ともにこの理想言語という問題を内包しているように思われ

るからである。ここでの「理想言語」とは，通常の言語すなわち自然言語の背後もしくは彼岸に「より完全なる言語」として発見されるべきものである。近年このモティーフを追った思想史的研究は非常に活発で，ギリシャあるいはヘブライの文化に始まって現在のコンピューター文明にいたるまで，いかにヨーロッパ的知性が「完全性・普遍性を持った言語」を求めて試行錯誤をくり返してきたかを描写する歴史書がさかんに出版されている[1]。それらによれば，より完全なる言語としての理想言語は，ヨーロッパの哲学の歴史の中では真理の担い手と見なされてきた。あらゆる事物や理念の本質を過不足なく伝え，しかも誤解の余地がない理想言語は，全世界，全人類を統一する完全なるコミュニケーションとあらゆる正しい判断を可能にするものだ，というのである。バベルの塔が破壊される以前には，人間はこの言語を持っていたということになる。

2．初期ウィトゲンシュタイン　—理想言語としての論理

古来しばしば，「論理」がその見た目の客観性ゆえに理想言語，少なくともその母体もしくは出発点と見なされた。もし，あらゆる言語を真に論理的に用いることができたなら，普遍的な言語へと到達し，全ての哲学上の問題を解決することができるのではないか，という発想である。若き日のウィトゲンシュタインの発想も基本的にはこの線上にあった。彼の考えでは，言語の運用において論理を徹底的に適用すれば，哲学上の問題は解かれるのではなく，消滅する，というものだった。初期ウィトゲンシュタインは言語を命題の総体としてとらえた。そして，意味のある命題はつねにその真偽を問うことができると考えた。もし，「真か偽か」を問うことができないなら，その命題は無意味であり，したがってこれを用いることはできないというわけである。そのためには，ひとつの命題は現実の「像(Bild)」として，外界にひとつの対象を持ちえなければならず，この対象こそがその文の意味である，というのが初期ウィトゲンシュタインの考えだった。これは，当時のウィトゲンシュタインにとっては究極の結論であった。この「像」の理論は先験的に真理であると思われたからだ。それは，「『今日

は天気が良い』という命題が真ならば今日は天気が良い」ということが本当である理由であり，同語反復，トートロジーであるとされたのである。そして，この時期における唯一の著作である『論理哲学論考』(2)の最後に置かれた文である「人は語りえぬものについては沈黙しなくてはならない」というのが，彼の初期哲学の到達点，もしくは到達すべき点であった。言いかえれば，語りうるものについてのみ語ること，これこそが初期ウィトゲンシュタインにおける理想言語だった。なぜなら，「語りうることのみを語る」という努力は，言語活動をその根底において可能にしているあるものと，自らの言語を一致させようという試みだったからだ。あらゆる言語が，意味する対象を外界にたしかに持つならば，その言語の全体は世界の全体に完全に対応し，したがって「バベル以前」の理想言語としての地位を獲得しうると考えられたのある。そして，人生の意義，あるいは倫理というような問題は，ただ悟られるべきものであり，言語の，すなわち世界の限界を超越したことがらである，とされた。

倫理が言葉に出せないものであることは明らかである。

倫理は超越論的（transzendental）である。

（倫理と審美はひとつである）（『論理哲学論考』6.421節）(3)

3．後期ウィトゲンシュタイン　—自然言語の「使用」を記述する

後に，ウィトゲンシュタインはこの発想を変更する。言語の正当な使用とそうでない使用とを分けようとする態度を放棄したのである。純粋に論理的な言語使用という観点からなる「像の理論」では，人間の言語活動のごく限られた一面しか視野に入れることはできなかった。挨拶や身振り言語，レトリカルな表現，倫理や美学に関する思弁は，かならずしも論理的ではないからといって，無意味で，存在を許されないようなものではない，とウィトゲンシュタインは考え直したのだった。

後期ウィトゲンシュタインは「言語ゲーム」という用語を提案し，この言葉のもとに人間のあらゆる言語活動，もしくは，身振りなどの言語的な活動を視野の中に取り込んだ。ここでは，ウィトゲンシュタインは「言語

の意味ではなく，その言語の使用を見よ」と主張する。つまり，子供に「赤いリンゴを買ってきなさい」と言いつけた時，この発言の意味は，実際にこの子供が赤いリンゴを買ってくることによって示される，というのである。「赤い」とは何か，「リンゴ」とは何か，「～を買ってきなさい」とはどういうことか，ということについては，色のカードを使ったり，植物図鑑を見せたり，文法事典を参照したりしていくらでも説明することはできるわけだが，にもかかわらず最終的な説明となると実はできない，というのがウィトゲンシュタインの発見だった。

なぜ，ある紙の色とある果物の色が同じ「赤」と呼ばれるものであるのか，そもそも，「色」とは何であるのか，というようなことは，「赤いリンゴ」という語の使用を背後から支えるある種のルールなのだろうが，このルールそのものを直接に，全体的に説明することはできない，「赤いリンゴ」という語が子供のお使いにおいて通用して初めて，そこにどのようなルールが働いたのかを事後的に，具体例としてのみ描写することができるというのである。このルールをウィトゲンシュタインは「生活の形式」と呼んだ。論理や文法が言語の使用に先行するのではなく，ある言語が使用されて初めて，その使用と，それを可能にした「生活の形式」を論理や文法が追いかけてゆくというのだ。そういう「生活の形式」の中で，それぞれの言葉は，まるでチェスの一手一手のように働いてゆく。これを，ウィトゲンシュタインは「言語ゲーム」と呼んだ。ウィトゲンシュタインは「言語の使用」を記述することを「哲学」と呼んでさえいる。

> 哲学は言語の現実の使用を，いかなる仕方においても侵害してはならない。つまり，哲学はそれを，結局，ただ記述できるだけなのである。なぜなら，哲学は言語の使用を基礎付けることもできないのであるから」（『哲学的探求』124節）[4]。

ここにおいて，ウィトゲンシュタインの哲学は，言語の用いられ方をコントロールしようとするものではなくなっている。つまり，初期に見られた，「論理的に意味のある命題のみからなる理想言語」への志向は明白に放棄されている。言いかえれば，普通の言語，自然言語の背後にあって，言

語活動を可能にしているものをまるごと把握するという野望を断念している。これは，例えば最近のコンピューター工学における，人工知能の問題にも通じるものだ。すなわち，当初「人間のように考えるコンピューター」を作るという野望のもとに出発した人工知能という試みが，結局は英語なり，日本語なり，自然言語の，様々な用途に応じた「使用法」をひたすらコンピューターに打ち込む作業に追い込まれたことと，まさに同じ経緯と言える。

とはいえ,「ウィトゲンシュタインは理想言語への志向を完全に捨て去った」と決めつけるのは早計であろう。なぜなら，ウィトゲンシュタインは言語を可能にしているものが「存在しない」とか「そんなものについて考えるのは間違っている」と言ったわけではなく，ただ「言語の使用を記述せよ」と言っただけなのだから。

いわば，後期ウィトゲンシュタインにおいては，理想言語は自然言語の背後に隠れているのではなく，まさに自然言語そのものに「おいて」示されているのである。

4．ベンヤミンの『翻訳者の使命』 —自然言語のハーモニー

ウィトゲンシュタインの言語観が自然言語に視線を落としたところで，私たちはベンヤミンの言語観に視線を転じることにしよう。複数の自然言語の比較検討，すなわち翻訳という作業こそ，ベンヤミンの言語哲学的思索の出発点だったからだ。ベンヤミンがその言語観をストレートに表現したのは，比較的初期に書かれたテクストにおいてであった。ここではまず『翻訳者の使命』を見てみよう。ボードレールの翻訳詩集への序文として1921年に書かれたこの文章は，翻訳論であると同時に，後年になってもベンヤミン本人が自らの言語哲学を集約した文章と評価しているものだ。

ここでベンヤミンは，彼の理想言語について論じている。あらゆる言語と言語の関係の中に，ハーモニーとして鳴り響く「純粋言語」というのがそれだ。ベンヤミンによれば，翻訳者の使命とは，ある言語で書かれた原典の意味をもうひとつの言語の中に再現することではなく，翻訳の中にこ

の純粋言語の萌芽もしくは核を鳴り響かせ，原典となるテクストに生命を続けさせることだというのである。意味の再現は，ベンヤミンの考えでは本来不可能だ。なぜなら，意味とはつねに変転するコンテクストの中にあるものであり，必然的にひどく多層的なものであるから。したがって，言葉の真の意味を直接に現前させうる言語が理想言語であるなら，それは，現実に存在する，あるいは存在しうるひとつの言語体系によっては実現されるべくもない。しかし，ベンヤミンにとり，「純粋言語」は形而上的な幻想ではなく，あくまでも翻訳という作業の前提となるものであり，全ての自然言語が相照らし合う関係の中に感じ取られるべきものだった。

> 2つの国語の血縁性は，歴史的な起源を別にすれば，どこに求められうるだろうか？　文学作品が似ているからでもなければ，単語が似ているからでもない。むしろ，歴史を超越した諸国語の血縁性は，おのおのの国語がそれぞれの全体において，ひとつの同じものを志向している点にある。そうはいってもこの同一のものは，どれかひとつの国語によって到達されるようなものではない。それは，諸国語の互いに補完しあう志向の総体によってのみ到達可能となるものである。これが，純粋言語だ。つまり，諸国語のあらゆる個々の要素は，語も文も文脈も，互いに排除しあうのだが，これに反して，諸国語はその志向そのものにおいては，補完し合うのである。(『翻訳者の使命』)[5]

ベンヤミンは，「意味されるもの」と「意味する仕方」を区別する必要を説いた。たとえば2つの語，英語の「dog」と日本語の「犬」においては，「意味されるもの」が同じ動物である場合はありえるが，「意味する仕方」は異なる。この2つの語の英語と日本語のシステムの中での立場や役割，つまり「言い方」はそれぞれ独自のものであり，排除し合うものでさえあるのだが，翻訳においてはじめて，この両者は補完し合うものとなり，この2つの語の間の反響の中で「意味されるもの」はより明らかで純粋なものになってゆくのである。

> 個々の，つまり補完されていない国語の場合，その国語全体によって意味されるものも，個々の語や文においてと同様，相対的な自立性

にはけっして達しえない。それはむしろ，あらゆる言い方の調和の中から，純粋言語として現れてくることができるまでは，不断の変容の中にあるのだ。(『翻訳者の使命』)(6)

純粋言語の萌芽は，原典のテクストの中に秘められており，その萌芽は翻訳を通して，2言語間のハーモニーとして，より高く，より純粋な領域へと成長してゆくのだ，とベンヤミンは言う。

翻訳者の課題は，その中で翻訳がなされる言語への志向を通じて，原作のこだまがその言語の中に目覚めさせられるようにすることにある。この点に，創作とはまるで違う翻訳の特徴がある。[……]というのも，多くの言語をひとつの真の言語へと総合するという壮大なモチーフが，翻訳者の仕事を満たしているのだから。だが，この言語は，その中で個々の文や，文芸や，判断が了解されるような言語ではけっしてない(そういう点では，依然として翻訳が頼みの綱になる)。しかし，そこでは，諸国語自体が互いに，その言い方において補完され，和解し，一致しているような，そういう言語である。だがもし，あらゆる思考が努力の的とする究極的な秘密が，穏やかに，みずからは沈黙しつつ，その中に保たれているような真理の言語があるとするならば，この真理の言語こそ—真の言語なのである。(『翻訳者の使命』)(7)

ここに見られるように，ベンヤミンにおける純粋言語はまぎれもなく「真理の担い手」としての理想言語である。そして，それは単一の言語としてはけして手中におさめることはできないものだが，翻訳という作業を通して，その存在が音の反響のように暗示されるのである。

ベンヤミンは，純粋言語を志向する翻訳の実際的な問題についても論じている。それは，忠実と自由，すなわち，意味を再現する上での自由と，その作業過程にあっての語への忠実をめぐる議論である。「意訳と逐語訳はどちらが望ましいか？」という問題だ。テクストの統語論的な形式を別の言語の中に忠実に再現しようとすると，文章の意味がひどく損なわれてしまう，またその逆もしかりである，というのは翻訳における古典的な問題である。通常我々は，適度な意訳を好ましい翻訳とすることが多いが，ベ

ンヤミンはむしろ逐語訳によるシンタクスの保存を推奨している。その理由は，先に述べたように，意味の忠実な再現というのは，不可能であるからだ。

純粋言語を思考する翻訳のモデルとして，ベンヤミンはヘルダーリンによるソフォクレス翻訳に言及している。この翻訳は，あまりにも逐語的に過ぎるということで，従来評価が低かったものだが，これをベンヤミンは「翻訳形式の原像」として評価した。翻訳者の仕事は，意味を再現することではなく，ある言語をもう一方の言語と結びつけることであり，そのためには逐語性が要求されるというのだ。

> すなわち，割れた器の破片を組み合わせて繋ぐためには，破片同士が同じ形である必要はないが，その継ぎ目においては，細かいところまで互いに嚙み合わなければならないように，翻訳は，原作の意味に自身を似せてゆくのではなくて，むしろ愛をこめて，細部にいたるまで原作の言い方を自身の言語の言い方のなかに形成してゆき，その結果として両者が，ひとつの器の破片，ひとつのより大きい言語の破片と見られるようにするのでなくてはならない。だからこそ翻訳は，何かを伝達するという意図を，意味を，極端に度外視せねばならぬ[8]。

ベンヤミンの言う翻訳者の課題は，「意味されるもの」にではなく，「意味する仕方」，「言い方」に関わる。「言い方」に沿って仕事をすることによって，「意味されるもの」の言わば究極的な姿であり，直接にはけして扱いえない純粋言語に近づくことが可能だというのである「言い方」に沿った逐語訳を徹底すれば，訳文が理解不可能なものになる危険はもちろんある。しかしベンヤミンは，この危険を冒さずしては翻訳者はその使命を遂行しえない，と主張するのだ。

ところでベンヤミンは，純粋言語のモデル，いわば比喩として，聖なるテクストについて論じている。聖書やコーランのような，聖なるテクストにおいては，意味されるものと意味する仕方を分離することができない。啓示として，アラビア語なりヘブライ語なりギリシャ語で記されたこれらのテクストは，それ自体が神の言葉であるから，日常の言語のように何ら

かの意味内容を伝達すれば事足りるのではなく，その文字としての側面，音声としての側面，その他言語としてのあらゆる外的特徴までもが，究極の意味を持つものとみなされなくてはならない。いわば，聖なるテクストにおいては内容と形式が一致しているものとみなされるのである。イスラム教において，コーランをアラビア語以外の言語に翻訳することが原則としては禁じられていることは，こういう発想からは必然的なことと言える。

> このテクストに対しては翻訳は，無限に信頼を寄せていなくてはならない。そうすれば，テクストにおいて言語と啓示とが，うちとけて合一しているように，翻訳において逐語性と自由とが，行間翻訳の形態をとって合一することとなろう。なぜなら，あらゆる偉大な文書はある程度まで，しかし聖書は最高度に，その行間に潜勢的な翻訳を内包しているのだから。聖書の行間逐語訳 (Interliniearversion) こそ，すべての翻訳の原像ないし理想にほかならない。(『翻訳者の使命』) (9)

聖なるテクストは，信仰を持っている人以外には普通の文書に過ぎないだろう。したがって，それはある限られた社会の中でのみ「真理の担い手としての理想言語」として通用するに過ぎない。しかし，ベンヤミンはこの聖なるテクストをある種の模型として，純粋言語の性質およびそれを志向する翻訳のあり方をスケッチして見せたのだった。

5．結論　―沈黙する神的言語

ウィトゲンシュタインとベンヤミンはともに，自然言語の背後もしくは彼岸にある真理の言語，理想言語を直接手中に獲得することの不可能性を認めた。しかし，両者とも，なお理想言語に向かう志向を放棄したわけではない。彼らは，言語を意味の容器ととらえる発想から離れ，したがって，意味を十全に表現する言語としての理想言語を問題にしなくなったが，依然として彼らの思考は言語というものに「真理」への契機を見ようとするものだ。

ウィトゲンシュタインによる「意味を問うな，使用を見よ」という主張は，ベンヤミンにおいては，「意味されるもの」にではなく「意味する仕方」

に沿って翻訳せよ，という要請に対応するものだ。意味を直接扱うことを断念してはじめて，言語のある本質に迫ることが可能なのである。ベンヤミンは，『翻訳者の使命』に5年先行する1916年のテクスト『言語一般あるいは人間の言語』[10]においてすでに，言語の内容が問題なのではない，と言い切っている。

> あらゆる言語は，自分自身という形で自分自身を伝えるのであり，言語とは，最も純粋な意味において伝達の「媒質」なのである。この能動即受動性（das Mediale），これこそ全ての精神的伝達の直接性（非媒介性）であり，言語理論の基礎である。
>
> （『言語一般あるいは人間の言語』）[11]

> 言語の内容というものは存在しない。伝達として，言語はある精神的本質を，すなわち，もっぱら伝達可能性そのものを伝えるのである。
>
> （同）[12]

意味や内容について語ることができないということは，ある主体がどのような意味である言葉を発したのか，また別の主体がどのような意味とともにその言葉を受け取ったのかを問えないということだ。この際，言語は主観による解釈から切り離されることになる。『翻訳者の使命』の冒頭には次のような一文もある。

> どのような文学作品も読者に向けられたものではないし，どのような絵画も見物人に，どのような交響曲も聴衆に向けられたものではない。
>
> （『翻訳者の使命』）[13]

ウィトゲンシュタインにとっても，言語は，主観—客観の関係を超えるところにあった。もっぱら主観によって創出された私的言語は不可能であること，すなわち独我論的物言いの不可能性を，ウィトゲンシュタインは，人間が赤ん坊としてまず他人から言語を教わらなければならないという事実を例にして説く。主観による世界の分割が言語を可能にするのではなく，ある体験が他者によって名づけられることによってはじめて言語の使用が可能となる。この言語習得という出来事こそ言語ゲームの開始される地点

なのである。

ウィトゲンシュタインは，次のような戦略的反問をあげ，これにいささか同情的に答えてみせている。

> しかし，文に意味を与えるのは，我々の思念ではないのか？［……］そして思念こそが，精神の領域を担うものなのである。しかしそれはまた，何か私的なものでもある！　それは，とらえがたい何物かなのであって，意識そのものにのみたとえられうる。
>
> ——この考えをどうしてあざ笑うことができよう！　これはいわば，我々の言語が見る夢なのである。　（『哲学的探求』第358節）(14)

つまり，意味を生み出す精神的なるものとしての「思念」に対する信仰は，共感に値するとしても，ひとつの夢に過ぎない，覚醒した現実は，意味とは直接の関係を持たない言語の本質にのみ存する，というのである。言語の考察において，私的なもの，もっぱら主観的なものをひとまず切り捨てることによって，ウィトゲンシュタインはベンヤミン同様，「言語は何らかの内容の伝達ではない」という視点に立つ。ここで，重大な言語観の転回が起こる。言語は内容という特権を失うことで，事物一般と同じ次元に引き込まれることになるのである。言語と事物との間の違いが消失するわけではないが，事物と言語が相互に直接関係を持ちうる，両者が互いに接続されうることが発見されたのである。言語ゲームにおいては，それぞれの言葉がチェスのようなゲームの一手，一手とみなされるわけだが，チェスの駒自体にも，駒の動き方を記したルールにも，ゲーム中の一手の持つ意味を求めることはできない。コンテクストもしくはシンタクスを得て初めて，この意味を語ることが可能になる。しかし，このコンテクストやシンタクスはもはや旧来特権的であった文字言語や音声言語によってのみ形作られるのではない。あらゆる事物も巻き込んで，言語ゲームは壮大にプレイされるのだ。

さて，しかし，何のために，また何をめぐって，このゲームは行われるのだろうか？　あるいはそれは，ダンスのように，目標を持たない遊戯なのだろうか？　ウィトゲンシュタインによれば，「赤いリンゴを５つ買って

きなさい」という命令の意味は，たとえば実際に子供がリンゴを買ってくることによって示される。しかし，実際には，多くの言語活動においては，そういう実現というものは欠けている。言葉によって何かを実現するには，より強い言語ゲームの「手」が指されなければならない。また，もし，その言葉が完全に十分に強いものであったなら，意味という問題は持ち上がらない。なぜなら，その言葉は何らの反省なしに，ただちに実現されるからである。言い換えれば，言葉に，この実現する力が欠けているときはじめて，その言葉の意味が問題となってくるのだ。たとえば，ある命令を与えられた人が，その言葉に対して何ら抗うべきものを持っていなかったなら，あたかもそれが自分の意思であるかのように，実行に移すことだろう。理想言語の真の姿は，伝達や認識ではなく，実現であり，生産なのだ。

これを神的言語と呼ぶこともできよう。聖書においては，神は言葉によって世界を創造したのであり，たとえば，「光りあれ」と叫ぶことで光を生み出したとされるからだ。通常の，人間の言語は神の言葉のような力はもちろん持っていないから，ベンヤミンによれば，そこにはあの創造的な力はただ破片としてのみ存在している。

> もはや何ごとも意味せず，何も表さない，表現というものを欠いた創造的な言語であるこの純粋言語は，あらゆる諸国語が志向するものであり，ここにおいて，あらゆる伝達，あらゆる意味，あらゆる志向は，ある気圏に達し，そこでそれらは消滅するように定められているのである。(『翻訳者の使命』)(15)

ベンヤミンの理想言語，純粋言語において，あらゆる意味と志向は消滅する。しかしこの消滅は暗い虚無へと導くものではなく，逆説的であるにせよ，世界を創出する力との合一として，至福であり，救済と見ることができる。しかしまた，この世界においては人間の言語はこの神的言語と絶望的にへだてられてもいる。『言語一般および人間の言語』において，ベンヤミンはこの神的言語と人間の言語のへだたりを「アダムとエバの堕罪」ととらえた。かつてエデンの園で神的言語に人間が初めて触れたとき，この神的言語が創造するものにことごとく「名」をつけてゆくことによって

神の創造を模倣した，しかし，人間の言語が「名」であることをやめ，たとえば善悪を認識するための手段となろうとする時，人間の言語は神の創造した世界からの乖離を始め，もはや裁きを通してしか救済されえないものとなる，というのである。

> アダムとエバの堕罪は「人間の言葉」の誕生の時であって，その言葉においては名はもはや無傷ではいられない。言葉は「名の言語」から抜け出て，すなわち認識する魔法，いわば内側の魔法から抜け出て，表現するもの，外側の魔法的なものとなったのである。言葉は（おのれ以外の）何ものかを伝達すべきものとなる。これこそ言語精神の堕罪だ。(『言語一般および人間の言語』)[16]

神学的，神秘的な物言いに満ちた難解な文章が初期ベンヤミンの特徴だが，レトリックを通して語られている言語観はむしろ旧来の形而上学への批判を含んでいる。言語が伝達の手段となることを「堕罪」と考えることは，言語の究極の伝達内容である真理やイデアといったものを批判することだからだ。

すでに明らかなように，ベンヤミンの「名の言語」は，初期ウィトゲンシュタインが指向した「意味のある命題のみからなる言語」と多くの特徴を共有する。「名の言語」は純粋言語そのものではなく，この創造する神の言語の似姿であるが，これは世界そのものと同一の形式を持つ人間による言語と言っていいだろう。ここには，ヨーロッパに伝統的な理想言語のイメージが影を落としている。しかし，この言語を（ふたたび）地上に存在させることはベンヤミンははじめから断念していたし，ウィトゲンシュタインもやがてこの企てを放棄した。そして，ベンヤミンは「翻訳」を，ウィトゲンシュタインは「言語ゲームの記述」を理想言語の追求に代わる課題としたのである。

両者の試みは，見かけ上ひどくかけ離れているように見える。翻訳はもちろんオリジナルを必要とするものであるが，言語ゲームという発想は言葉の意味の原像となるような何ものをも必要としないからだ。しかし，ウィトゲンシュタインは言語ゲームという言語観を提示するにとどまったの

ではなく，言語ゲームを「記述」すること，すなわち言語の使用を記述することを要請し，かつ自らその試みを行なったのである。背景となるコンテクストやシンタクスも含めて言語の使用を記述するということは，それ自体あらたな言語ゲームだ。それは，一度行われた言語ゲームを再現することではない。すでに過去のものとなりいわば死んだ言語ゲームに，別の言語を接続することによって新しい生命を吹き込むことである。これは，ベンヤミンの語った翻訳者の使命と意味をひとしくする仕事である。ここでの翻訳者もまた，意味を再現するのではなく，作品の翻訳という場においてふたつの言語を接続することを任としているのだ。

「翻訳」においても「記述」においても，主観的な解釈による言語の置き換えではなく，言語や事物のシンタックスの細部までを見つめた精密な描写が行われなければならない。なぜなら，そこには前もってルールなど存在しないからだ。ルールがないからこそ，作業は緻密にならねばならない。画家や写真家が大自然の風景を平面に写しとるように言語が言語を写しとる時，あの「沈黙しつつ創造する言葉」が虚心の耳に聞き取られるのだ。

> 経験論ではなく，哲学におけるリアリズム，これこそが最も困難なことなのだ。(『数学の基礎』)[17]

注

(1) ウンベルト・エーコは，著書『完全言語の探求』(上村忠男・廣石正和訳 平凡社・1995年：La ricerca della linga perfetta nella cultura europea. Roma-Bari 1993.) においてこのモティーフをめぐるパノラマ的な歴史叙述をおこなった。

(2) Ludwig Wittgenstein: Werkausgabe. Frankfurt 1984. (以下＝WA) Bd. I.

(3) Ebd. S. 83.

(4) Ebd. S. 302.

(5) Walter Benjamin: Gesammelte Schriften. Frankfurt 1972. (以下＝GS) Bd. IV. S. 13.

(6) Ebd. S. 14.

(7) Ebd. S. 16.

(8) Ebd. S. 18.

(9) Ebd. S. 21.

(10) 当時ミュンヘン大学に在学していたベンヤミンは，学友ゲルショム・ショーレムとの交遊からユダヤ思想に深く傾倒し，このエッセイを書き上げた。ユダヤ神学の影響が色濃いこの文章は，安易な誤解を避けるために，ショーレムら小人数の友人たちの間でのみ回覧された。

(11) GS. Bd. II. S. 142.

(12) Ebd. S. 145.

(13) GS. Bd. IV. S. 9.

(14) WA. Bd. I. S. 323.

(15) GS. Bd. IV. S. 19.

(16) GS. Bd. II. S. 153.

(17) WA. Bd. IV. S. 325.